

我楽苦多雑感3

社会保険労務士 佐長 純彦

正月三が日も終わり年始の人手も一段落したころ、ここ数年来恒例となっている伊勢詣でに出かけた。移動手段はもっぱら車で、ドライブ好きの私にとって片道3時間程度の運転は大きな負担ではなく、適度なストレス解消になり心地良い疲労感が好きだからである。いつもはウィークデーに出かけることが多いのだが、今回初めて初詣を兼ねて松の内に訪れてみた。1泊2日のささやかな家族旅行である。外宮、内宮と回って宿泊するといういつもの行程である。今までは鳥羽、宇治山田、松阪周辺のビジネスホテルを宿とすることが多かったのだが、今回は27年ぶりに民宿に泊まることにした。というのも、折角海のもの豊富な所に行くのだから魚料理をふんだんに食べてみたいと思いネットで宿を調べていたころ、リピーター率70%という漁師民宿が目にとまったからである。口コミ情報も概ね良好なためここに決めることにした。1泊2食で一人税込8640円という良心的な料金であることも決め手の大きな要因となった。

当日は年末年始の荒れた天気とは違って変わって穏やかに晴れ渡り、少し動くと汗ばむ陽気であった。気持ちの良いドライブで外宮、内宮と回って静謐な気持ちでお参りを済ませ、それぞれで古いお札を納め新しいお札を求めた。そして、夕食に大きな期待を抱きながら昼食も1杯500円の伊勢うどんのみで我慢し、志摩市にある宿に向かった。

内宮より小一時間で宿に到着してみると、客室が10室程度の民宿としては中程度の建物であった。入口はガラスの引き戸であったがそこにはべったりと多数の指紋が付いており小まめな掃除がなされていないことが明らかであり、いきなり出鼻を挫かれた感であった。案の定玄関もスリッパが雑然と置かれ所々埃の玉が転がっていた。客室は襖で仕切られているものもあるようであったが、案内された部屋は6畳間で一応個室としての態をなしていた。しかし、トイレ、洗面所は共同でトイレは男女とも一般的な家庭仕様のもので、洗面所もせいぜい3人が同時に使えるものが1ヵ所しかなかった。そして、夕食まで時間があつたために風呂に入った。風呂場は男女別にはなっていないものの洗面所と同様に同時に3人が入れれば限界であろうという代物で、当日は我が家以外に一組の家族が宿泊しているのみであったので大きな不便は感じなかったものの、これでは多客期にはまともにトイレも風呂も利用できないではないかという懸念と居心地の悪さを感じながら早々に風呂から上がった。

部屋に戻って程なくして夕食の用意ができたとの案内があり別室に移った。そこには刺身の舟盛を中心に様々な魚を素材とした各種の料理が目にも鮮やかにしつらえられていた。「これだよ、これ。」と今までの不快感が一気に払拭されていく自分に思わず笑いが出た。逸る気持ちを抑えつつまずはビールで乾杯。一気に飲み干すと早速舟盛に箸をつける。ヒラメの生造りをメインにイカ、ホタテ、赤貝等々次々と口に放り込む。「旨い。」さすがに新鮮で期待を裏切らないもので、天ぷらも揚げたてが出されこれも美味しかった。これらを堪能し一息ついた頃周りを見回してみた。八寸、煮物（タイの尾頭付きの煮付）、焼き物（ブリの照焼）、海老のグラタン、茶碗蒸し等々と心づくしの一品が並ぶ。期待を胸に再び箸を口に運ぶ。三口、四口と食べ進むにつれ「うんっ、これは…」。グラタン、茶碗蒸しは別として、全ての料理の味付けが同じでなおかつ濃く（甘辛く素材の味が分からない）、そして作り置き感が拭えないのである。茶碗蒸しも韓国の卵蒸しもかきやと思わせるほど「す」が入っており出汁も妙に甘い。その時、これはどこかで食べたことのある味であることに気付いた。記憶を辿るとやはり以前伊勢詣でに来た際宇治山田の和食店で経験したものであった。

一般的に関西地方は、京料理に代表されるように素材の持ち味を生かすため出汁を重視した薄味の調理手法であるが、伊勢地方のそれは明らかに「東」のものである。言葉こそ関西弁のイントネーションであるが食文化に関しては東海、関東地方の影響が強いと思われる。そういえば、伊勢地方のある三重県には「アホ」と「バカ」、カレーに入れる肉が「牛肉」と「豚肉」という東西の文化が混在する地域があるということを知ることがある。

しかしながら地政学的な相違はともかく口に合わないことは事実であり箸の動きがぱたりと止まった。向かいの妻に目をやるとやはり困惑した表情を浮かべている。妻は東京の出身で亡き両親も新潟県と宮城県の出身

であり「濃い」味覚の下で育ってきたのであるが、子供のころから煮物の味には辟易としていたというくらい薄味好きである。

やや重苦しい空気が漂うなか妻が口を開いた。「私たち贅沢してきたのかなあ…。」、「間借りで育ってきた二人なのに…。」私ははっとした。妻は料理の味付けのことだけを行っているのではなく、宿に着いた時から感じていた様々な違和感を受容できない今の自分の不寛容さに戸惑っていたのである。それはまさに私自身のことでもあったからだ。

私と妻は神戸と東京の違いはあれ物心がつくまでは同じように一軒家の間借りに住み、駄菓子屋で人工甘味料、人口着色料にまみれた菓子を有難がって食べ、その日の米を買いに行き、服はお下がりで継ぎの当たったものは当たり前という貧乏というものを知って育った世代だ。

このような生い立ちで今も妻はパートで働き相変わらず余裕のない生活をしている二人だからこそ、大病もせず健康に正月を迎えられ、ささやかながらもこうして旅行に出かけられることの幸せを噛みしめなくてはならないのではないか。ましてや阪神淡路大震災で被災し、あらゆる世俗的な欲の虚しさと人の好意の有難さを痛感したではないか。何故人は知らず知らずのうち謙虚さを忘れ、こうも傲慢になるのだろうか。強く自戒しなければならぬと思った1泊2日であった。

2015年1月16日

阪神淡路大震災から満20年（法律上）の日に記す。



佐長 純彦

中央大学法学部法学科卒。印刷出版会社を経て、1992年社会保険労務士登録、開業。兵庫県社会保険労務士会理事1期2年、神戸東支部長1期2年。(財)介護労働安全センターより委嘱を受け、十数年にわたり研修会講師及び雇用管理コンサルタントとして相談・指導。各種企業・団体等からの依頼による講演やセミナー講師。幅広い業種における社会保険・労働保険に関する一般実務や相談業務など。

江戸町
社労士
ファーム

事務所報